

# ご退職の先生方からのメッセージ 母校を愛する気持ち

高野雅郎先生

広辞苑をみると、母校とは自分が学んで卒業した学校とある。西高も創立三十年を経過し、卒業生の皆さんはそれぞれの在学時代を懸命に学び生きてこられたわけでありませう。そして各自は自分の時が一番良かった、という思いが強いのではないのでしょうか。それが母校を愛する気持ちだと思います。間借り生活でスタートしたあの時代、狭い校門の前の泥んこ道、渡りを雨が降ると黄色い傘をさして渡った頃、おかげで合宿のフトンも手すりに干せたわけですね。修学旅行でなせ三方面に分かれて行くのか、とクラス企画の全校放送で両論の激論もありました。私は西高が一番長期となり十七年勤めさせて戴きました。当時は群の時代で何かにつけて相手校を意識し部活も例外ではありませんでした。真崎先生のおとハンドボール部をまかせられなにかして栄光の座を死守せんものと、素人の私は県下の強力校とよく練習試合をさせてもらいました。冬のインドア県大出場前の十二月一月は夜の八時すぎまで体育館で練習をやりました。作戦盤を囲んでよく生徒同志ミーティングを自主的にやっていました。これは当時の勉強でもいえることで、独立自尊の精神で自分なりの勉強方法を持って頑張り続けたわけですね。

私は母校の為に西高のためにとかいって言葉は嫌いです。在学時代の教師と生徒がお互いに人格を尊重し合い懸命に生きてい

く、その集大成が西高を創り母校をつくりあげていくものと思います。その為に西高が生徒の意思を尊重した自由な学園でなくてはならないと思います。卒業生の方々もそういう思いで母校西高の良さを同窓会などで熱く語り続けてください。私にとっても第1の母校である西高の諸先生方、多くの卒業生の皆さん、長い間本当にありがとうございました。

## 西高の十四年間

鎌倉喜久先生

私の在任中の十四年間というのは、随分学校体制に変化を見た歳月でした。学校辞制度も一宮・一西のどちらかに振分けられて入学していましたし、定時制も併設されてきました。卒業式で働きながら学ぶ労苦を語る送答辞に感激するなどのこともありました。その後必修クラブは試行錯誤も経て今は一年生にその形骸が残っているという所でしょうか。学校行事の見直しも進みました。縮小されたり、無くなった行事もありません。修学旅行のようにメニュー方式になって、又、それ以前のような方式に戻ったものもあります。予餞会や球技大会のように廃止宣言が後で撤回されたものもあります。これらは生徒の声による所、大であったと思われまふ。

その間受験体制シフトは進み、テスト体制の強化、早朝・放課後の補習、課題の画一化などが進行了。いわば高校教育が、全体として大学入試の一点にかかわって評価される傾向が支配的となりました。

たしかに青年期というものはまさに希望を軸にしてあるものですが、それは青年の生活と、世界への関わり方から生れるべきもので、最も多感なこの時期も、まさに人生そのものの最も大切なときであって、これを各門校への単なる準備期間に矮小化したりすると、ひどいシッパ返しをうける場合もあります。西高の在任期間中はその事が一番の気がかりで、現代を生きる若者の生活と希望、社会の進展と個人のあり方などをもちと積極的に生徒のみならず一緒に考える必要があったのに、と退職した今、自分の非力を恥じています。けれども教科面ではまあ精一杯、それも心優しく、熱心なみなさんに囲まれて、つくづく幸せであったと思っています。皆さんのご活躍を期待しています。

## 光に満ちた瞬間

大崎慶子先生

離任式の夜、宴会が終り、送っていた校門まで帰ってきました。○先生の車も走り去り、一人っきりで、丁度校は満開、校舎の向こうの空には月まで皎々として、ああ、この時が、私にとっての西校との別れなのだ、いつもの感傷癖に傾きかけましたら、突然、体育館のあたりで、人の声がしました。ドキリとし、校門の脇に止めてあった自分の車に急いで乗り込み、これが、現実というものなのだと思います。卒業生の皆さん、お元氣ですか。高野先生と一緒にという、自分なりの美字を修行しました。年を重ねるにつれ、学校にいる自分を、離れたところから見ている自分の存在が大きくなりました。

朝の光の清澄さと、午後の風のそよぎ夕暮れの安らぎ。生きる味わいは、自然と共にいる方へと傾きました。花を愛で、旅をし、音楽を聴いて、本を読む、という生活を願っています。無常のままに逝ってしまった、日本松先生のお姿は、「人生の秋」への自覚を深めさせます。心静かに、つましくありたいと思っています。

## 日本松素先生ご逝去

本校旧職員の日本松素先生が平成七年三月十四日お亡くなりになりました。先生は昭和四十三年に西高にご赴任以来、二十五年間、西高の歴史とともに歩んで来られました。平成五年三月に定年でご退職になったからも非常勤講師として漢文の授業を担当していただいております。先生の深いご見識とあなたかなお人柄を思うにつけ、残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

## 同窓会役員交代

平成六年度の総会において、左記のとおり役員交代が承認されました。(敬称略) 監査 松山 猛(全吉)の回生に代わり、岸田清文(全吉)の回生

## 訂正とおわび

昨年度の会報に同封した「創立30周年記念事業基金応募者芳名」に左の方の芳名がもれていました。おわびして訂正いたします。